シェリ訳『ヘルメース讃歌』

——読むに値する韻文訳——

神保菘

シェリ（P. B. Shelley, 1792–1822）訳『ヘルメース讃歌』（*Hymn to Mercury Translated from the Greek of Homer*, 1820）はかなり評価されている。イヴリン・ホワイト（Hugh G. Evelyn-White）はロエブ版『ホメーロス讃歌』の序文で『ヘルメース讃歌』が滑稽な特質に於いて他の讃歌とは異なることを指摘した上で、「それはシェリ訳が出たお蔭で英語で読む人々には讃歌の中で一番よく知られている。」*1 と言い、これより前 19 世紀末にラング（Andrew Lang, 1844–1912）は彼自身のこの讃歌の散文訳への序文で、「『ヘルメース讃歌』のテクストは誤りだらけで欠陥本（*lacunæ*）とさえ言える。英語で読む人なら当然、他のどの訳よりも、生き生きとした魅力的なシェリ訳を選ぶだろう。詩人は混乱したテクストのいくつもの落とし穴にはまっても目に見えてもがいたりはせずに物語をうまく潤色して語ることが出来るものである。」*2 と讃辞を呈している。これら二つの評はシェリ訳の特徴をよく示している。これらを念頭においてシェリがどのような意図と目的でこの仕事を手掛け、どのような努力をしたかを吟味し、この仕事の意義を考えたい。次の手順で論をすすめたい。

I　『讃歌』翻訳に至った経過及び意図
II　ヘルマン版とシェリ訳
III　シェリ的表現・シェリ的解釈——逐語（literal）訳より読むに値する韻文（legible）訳を——
IV　シェリ的表現と詩型の活用
V　まとめ

---

* My thanks are due to the Bodleian Libraries, University of Oxford for kind permission to publish from the Bodleian Shelley MSS (Bodleian MS. Shelley adds. e.9, pp. 117 and 118) in this article: 'Shelley's *Hymn to Mercury Translated from the Greek of Homer*: A Legible Translation' by Suzuna Jimbo.

*1 *Hesiod, Homeric Hymns, Epic Cycle Homerica*, with an English Translation by Hugh G. Evelyn-White, The Loeb Classical Library, [1914], repr. 1998, p. xxxvii.

*2 Andrew Lang, *The Homeric Hymns, A New Translation and Essays, Literary and Mythological*, George Allen, 1899, p. 35.

I 『讃歌』翻訳に至った経過及び意図

シェリが『讃歌』を読んだきっかけはオックスフォード以来の親友ホッグに熱心にすすめられた（1817年4月5日）からである*3。7月11, 12, 13日に『讃歌』を読み*4、10月には『讃歌』が『イーリアス』や『オデュッセイア』とは別に印刷された版を注文し*5、1818年1月に33の『讃歌』から比較的短いものを6篇、全部または一部分訳したところで、目の具合が悪くなり（ophthalmia)、更にイタリア行きで家を引き払ったりで中断、3月11日に離英、約2年半後イタリアで一番長い『ヘルメース讃歌』を訳すことになる。

さてずっと愛読していた『イーリアス』や『オデュッセイア』とは「別に印刷されたテクスト」として受け取ったのはヘルマン版（G. Hermann ed., *Homeri Hymni et Epigrammata*, Leipzig 1806）であったろうと言われている*6。1817年から翌年はじめにかけての半年間は友人三人と共に自ら「ギリシア愛好の仲間」（the society of Athenians）と称してギリシア語に熱中していた。それ以来イタリアへ行く道中も渡伊後もギリシア語、とりわけホメーロス、ギリシア悲劇は毎日読み続け、同時に自身の創作も続けていたので『讃歌』だけに関しても2年半後に『ヘルメース』を訳した時のシェリのギリシア理解は2–3年前とは格段の差があった。したがって2年半前に『讃歌』6つを迷うことなく簡単に二行連句（couplet）で訳していたが、『ヘルメース』翻訳に際しては詩型その他に熟考のあとが見える。

その熟考のあとが見られる資料として『ヘルメース』翻訳前にシェリが認めたと考えられるメモに注目したい。シェリは1820年7月に翻訳した『ヘルメース』訳を記した同じノートブックの直前にこの訳に関する構想と見られるギリシア語4語ではじまる4つの断片を書きつけている*7。思いつくままに記された不完全なこれら断片の意図解明はなかなか困難であるが、重要な意味をもつと思われる。すでにこの手書きノートブックのファクシミリー版*8及びウェブの（シェリの翻訳を論ずる）*The Violet in the Crucible**9で、解読、解説されているが、二三疑問点があり、まだ検討不十分なので、この場で再考したい。ま

*3 *The Poems of Shelley*, ii, p. 338.
*4 *Mary Shelley's Journal*, p. 82.
*5 *Letters*, i, p. 565.
*6 Timothy Webb, *The Violet in the Crucible: Shelley and Translation*, Oxford at the Clarendon Press 1976, pp. 350–1.
*7 Bodleian MS. Shelley adds. e.9, pp. 117 and 118.
*8 *Percy Bysshe Shelley* vol. xiv, Shelley's "Devils" Notebook, Bodleian MS. Shelley adds. e.9, a Facsimile Edition with Transcription and Textual Notes, ed P. M. S. Dawson and Timothy Webb, Garland Pub. Inc. New York and London 1993, pp. 124–127, 284.
*9 Webb, *The Violet in the Crucible: Shelley and Translation* (cf. n. 6), p. 126.

ずこの手書き断片の私の（再考）解読案を、次に上記二書の解読案の問題点及び対策案を示し、然る後、それらを整理し 4 断片全体を通してこれらを書いた時の詩人の意図を考えたい。特にこのメモを記した時期（下記第 3 断片の部分で詳説）と殆んど同時期の 1820 年 7 月 12 日付親友ピーコック（Thomas Love Peacock）への手紙で詩人が伝えている内容をこのメモの第 3 断片と重ね合わせることによって、詩人の意図が鮮明になり、各断片がそれほど不完全ではなく、4 断片全体としても一つの繋がりと意味を持ってくると思われる。

The Four Fragments from the Bodleian MS. Shelley adds.e.9, pp. 117 and 118:

p. 117
ερικυδεος εκηβολος, εκαεργος δε
Wd fill up a blank verse, which is
ill & easily made by the herd of
Translators; but in the octave
stanza

Methought I was a billow in the crowd
Of common men—that stream without a shore
That Ocean which at once is deaf and loud
That I, a man, stood amid many more

When the structure of the verse
has rendered it impossible to express
literally the sense of the original
the author has *preferred*

p. 118
on the other hand it may be said
This translation is as bad as Popes—
without being as good;
that is it has all its faults & none of its
merits.—I beg those critics who
mean to speak unfavourably of it
to copy this sentence into their reviews,
unless they can find a severer—
(Italics mine.)

問題点 1　第 1 断片 2 行目、行頭の語をウェブは which と読んでいる。それは不可能ではないが文法的にすっきりしないのでファクシミリー版同様、Wd = Would と読みたい。

問題点 2 第 2 断片全 4 行は、この部分が過去形で書かれていることから、今まで、ホメーロス訳をした詩人たちの訳も余り感心出来ず「自分自身」も二年半前に余りよく考えずに二行連句（couplet）で訳したことを反省していると考えられる。特にシェリがこの時念頭においていたホメーロス訳はこのノートブックのファクシミリー版の註によればチャップマン（George Chapman, 1559?–1634）の『イーリアス』1611、『オデュッセイア』1614、『讃歌』1624?（以上チャップマン訳の詩型は全て二行連句）、ポウプ（Alexander Pope, 1688–1744）の『イーリアス』1720 及び『オデュッセイア』1725–6（いずれも詩型は二行連句）、それにクーパー（William Cowper, 1731–1800）の『イーリアス』と『オデュッセイア』（いずれも 1791 年出版で詩型は五脚抑揚調無韻詩 blank verse）であったと考えられる*10。しかしこの第 2 断片の 4 行が、なぜ過去形で書かれ、この抽象的表現が何をさし、この 4 行がどういう意味を持つかは、上記いづれの書物でも説明されていない。

問題点 3 第 3 断片は 4 行の完結されない文章で終わっているので判読が困難になるがウェブは 3 行目 original の後にコンマを入れ 4 行目を the author has *prefixed*（イタリックは筆者、以下同様）とし、そのあとに第 4 断片の（1 行目を省き）2 行目以下を 'This translation is as bad as Pope's—... severer.' として続けているがあまりしっくりつながらないし、これでは大変弱気なシェリの姿勢になる。このノートブックのファクシミリー版*11 にもある通り、これはあくまで『ヘルメース讃歌』を訳すに当ってシェリ自身が方針をまとめる時に自分で思いめぐらしたことを書いたメモで公表する気はなく、直後の自筆清書（Harvard MS. Eng. 258.2, pp. 110–145）*12 にもこのメモは入っていない。したがってウェブ案には賛成しがたく、それよりも、4 行目の最後の単語は 'preferred' と読み、この 'prefer' した内容を同時期に書かれたピーコックへの手紙から推測することを提案する。

Preferred の r が二つあるかどうかは判読しにくいが、例えばこの『ヘルメース』訳の 46 連の 1 行目 'O, let not e'er this quarrel be averred' (Bod. MS. Shelley adds. e.9, p. 146) の rre のシェリの書き方を参考に、又シェリ自身、自分では preferred と書いたつもりが自分用のメモであれば rre とはっきりは書かなかった可能性は多分にある。

さて次に、'preferred' で途切れた第 3 断片を書いていた時、シェリは何を考えていたか。直前の 3 行は「詩型（ここでは八行連句）故に原作の意味を逐語的に表現できない場合は」であるから、その場合シェリはどうしたいと考えていたか、ということを検討する必

*10 Cf. Facsimile Ed. of the notebook, p. 284.

*11 *Ibid.*

*12 Cf. *Percy Bysshe Shelley* vol. v, The Harvard Shelley Poetic Manuscripts, Facsimiles of the Harvard Shelley Fair-Copy Notebooks ... and Manuscripts of Shelley's Poetry (MS. Eng. 258.2, MS. Eng. 258.3 and fMS. Eng. 822), ed. Donald H. Reiman, pp. 105–141.

要がある。丁度このメモを書いたのと殆んど同時、すなわち 1820 年 7 月 12 日付親友ピーコックへの手紙でまさしくこのメモと同一内容が認められている。「僕は八行連句（*ottava rima*）でホメーロスの『ヘルメース讃歌』（'Hymn to Mercury'）を訳している。当然のことながらこの詩型で訳すと逐語訳は排除することになる（Of course my stanza precludes a *literal* translation.）。その代わり詩として読むに値するものにしなければならない（My next effort will be, that it should be *legible*）——これこそ（韻文）訳で大いに望まれる美点なのだ（a quality much to be desired in translations.）。」*13 という条りである。『ヘルメース讃歌』を訳し終えたのは 7 月 14 日*14 で訳を始めた記録はないが、ロングマン版のこの訳詩の解説にある通り「このノートブックには殆ど他の草稿や別のメモ類が皆無であるから、」*15 一気呵成に書きあげたものと考えられる。したがって書いた期日は最短で上記ピーコックへの手紙で「今訳している」といった 7 月 12 日から 7 月 14 日まで、ながくて「6 月末から」*16 7 月 14 日の間になる。いづれにせよ、訳し始める直前にこのメモを書きつつ、心の中では方針を固めメモを完成する間ももどかしく、あるいは他の何かの理由で訳に入ってしまい、調子が乗って来たところでピーコックへ上記の手紙を書いたものと考えられる。故に、ピーコックへの手紙にある「八行連句を用い、逐語訳ではなく、読むに値する韻文訳をめざしている。」というのはシェリ自身が決めた方針に従って今進行中の仕事の報告であるから、このメモを書いた時に考えていたことはこの手紙の報告と同じ内容の事であろうと考えて当然であろう。したがって 'preferred' のあとには 'that it should be legible—a quality much to be desired in translations.' のような内容を補うことが出来るのではないか。

問題点 4　第 4 断片の 1 行目をウェブは無視しているが第 3 断片に提案した内容とのつながりにはこの 1 行が生きてくる。

以上の観点から修正した私案に基づいてシェリのメモの内容を整理すると：

1. 無韻詩は、（脚韻の制約は受けない代わりに）これを使うと「ところが、輝かしい、遠矢を射る、遠矢を放つ」という決まり文句が訳詩を満たすことになる。これはホメーロスを訳す凡庸詩人たちによって気軽に行われているが詩をつまらないものにしている。しかし八行連句を使うと、
2. 我今まで凡人の群れの一員、

*13 *Letters*, ii, p. 213.
*14 *Mary Shelley's Journal*, p. 136.
*15 *The Poems of Shelley*, iii, p. 508.
*16 *Ibid.*

行きつく先もなく流れゆく群れの、
他の物音すべてを、消し去る大音響の大海中、
その大勢の中に一人の凡人として立つように思へり。

この4行は八行連句の前半の形で、内容的には今までのホメーロス訳を批判、彼自身も反省している*17。即ち、二行連句を用いたチャップマンやポウプ、連句の脚韻の制約を排し「原文に忠実に」「エピセットも英語になじめばそのまま」*18を看板に無韻詩で訳したクーパー等、今までホメーロスを訳した詩人たちやその読者そして自分自身も凡庸でこれが世間の趨勢となって目標もなく押し流されてゆく、という内容を、実際に八行連句の途中までで例示し、

3. このように韻律の制約故に忠実に原文の意味を表現することが出来なくなった場合は訳者としてはせめて読むに値するものにしたい。このほうがずっと大切なことだ。
4. それでもやはり私の意図が理解出来ずにポウプのほうがましだという批評家がいるかも知れない。これ以上酷い評論が見つからなければ（見つからないと思うが）「この訳はポウプの欠点をすべて持ち合せ、ポウプの取柄は一つもない」というこの文章を彼らの評論に書き写せばよい。

以上の構想ではじめたシェリの『ヘルメース讃歌』訳はかなり自信をもって集中して行われたと私は思う。即ちこのメモやピーコックへの手紙（1820年7月12日）の直後一気に訳し（下書きは7月14日終了）続いて前述の如く自ら清書もした。

II ヘルマン版とシェリ訳

次にシェリが使用したヘルマン版故の問題点をどう処理したか、あるいはヘルマン版が必ずしも悪いと言えない場合はどうか、次の三か所についてシェリ訳と比較して見よう。Gk.（OCT Allen版によるギリシア語原文）、S.（Jack Donovan etc. ed. Longman版によるシェリ訳）、必要に応じてCh.（チャップマン訳）の順でテクストを示す*19。

*17 この4行はこの同じノートブックの別の場所（Bod. MS. Shelley adds. e.9, p. 21）にも記されており、シェリの他の作品（*Adonais* や *The Triumph of Life*）との関連も考えられている。（Cf. *The Poems of Shelley* vol. iv, pp. 6–7, and Dawson and Webb, Facsimile Ed. of the Notebook, pp. xxi-xxiv.）しかしその同じ内容の事をシェリが『ヘルメース』を訳すに当って考えていたとしてもおかしくない。又詩型も Spenserian stanza あるいは *ottava rima* いずれの前半ともとれる。

*18 William Cowper, Preface to *the Iliad of Homer*, vol. i, p. xv.

*19 はじめの2カ所 Gk. 79–81 と Gk. 156–159 についてはウェブも指摘している（*Violet*, pp. 91–2）。

1 ヘルメースが牛を盗んだあと足跡をごまかすため工作する場面

Gk. 79–81
σάνδαλα δ' αὐτίκα ῥιψὶν ἐπὶ ψαμάθοις ἁλίῃσιν
ἄφραστ' ἠδ' ἀνόητα διέπλεκε, θαυματὰ ἔργα,
συμμίσγων μυρίκας καὶ μυρσινοειδέας ὄζους.
(Underline mine. Hereafter the same.)

79 *αὐτίκ' ἔριψεν* Herm.

S. 99–102 (st. 13)
His sandals then *he threw* to the Ocean spray
And for each foot he wrought a kind of raft
Of tamarisk, and tamarisk-like sprigs,
And bound them in a lump with withy twigs.
(Italics mine. Hereafter the same.)

Ch. 155–161
And he himselfe (as slye-pac't) *cast away*
His sandalls on the sea sands; past display
And unexcogitable thoughts in Act
Putting, to shunn of his stolne steps the Tract,
Mixing both Tamarisk and like-Tamarisk sprayes
In a most rare confusion, to raise
His footsteps up from earth.

ギリシア語 1 行目、ヘルマン版では *ῥιψίν*（こりやなぎを編んで）の代わりに *ἔριψεν*（彼は投げ捨てた）となっているので文法的にかなりアレン版とは異なってくるが、l. 79, l. 80 それぞれの動詞 *ἔριψεν* と *διέπλεκε*（編みあげた）に「サンダルを」と「前代未聞の名状しがたい見事な品物を」と目的語を割り当てて、次の分詞につないでいる。しかしこの「編みあげた」（シェリ訳は wrought）の目的語「前代未聞の……品物を」を文字どおりには訳さずに、S. 100 の如く、その「名状しがたい品物」が具体的にどんなものかを描き出す、即ち原文を音読した時に詩人の脳裏には、こりやなぎとこりやなぎもどきで編んだ今のスケートボード（但し両足別々の）のようなものがうかんだのではないか。したがってそれには自然 S. 101 も付いて出てしまい、Gk. 81 の *συμμίσγων* 以下は S. 102 'And bound them ....' とまとめている。したがって Gk. 79 は「海の砂浜に」の代わりに「海中へ」（to the Ocean spray）以外はヘルマンのテクスト通りの訳になっているが、Gk. 80–81 は 2 行ひとまとめの像として S. 100–102 の訳となっている。韻律の上からは、一音節語を主と

した素朴な単語が流れるように飛ぶように続き原文のリズム感をうまく表現して読んで楽しい。これに対してチャップマン訳は脚韻のためもあるがまず倒置（ll. 156–8 past display … Putting, l. 158 of his stolne steps the Tract）が目立ち違和感を与える。実に一語一語の用語と用法が不自然で原作への愛が感じられないのではないか。“ἄφραστος” を ‘past display’ (= beyond description)、“ἠδ’ ἀνόητα” を ‘unexcogitable’ (= that cannot be thought out) と訳しこれらはともに ‘thoughts’ に係る形容詞で、Gk. 80 を Ch. 156–158 で ‘Putting thoughts past display and unexcogitable, in Act’（名状しがたく考えも及ばない思考を実行に移して）と訳している。エリザベス朝好み（エリザベス女王自身は 1603 年に没しているが文学上の風潮は死後も続いた）と言おうか不自然さが強い。Gk. 81 は Ch. 159 で原文通り訳しているが、Ch. 158 ‘to shunn of his stolne steps the Tract’ (= to hide the track of his secret steps) と Ch. 160 ‘In a most rare confusion’ 及び Ch. 160–161 ‘to raise | … up from earth.’ はギリシア語原文にはない。原文の率直な表現、特にこの詩の素朴な雰囲気とスピード感にこのような修辞や表現又 l. 157 の unexcogitable というようなラテン語由来の固い言葉は合わないし、リズム感を壊す。従ってシェリはチャップマン訳を入手（1818 年 1 月 22 日注文、受取日は不明）後すぐに一読したに違いないがどれほど評価したかは疑問である。

2 牛泥棒をしたあと洞窟の揺籃に戻ったヘルメースをマイアが叱る場面

Gk. 156–159

νῦν σε μάλ’ οἴω
ἢ τάχ’ ἀμήχανα δεσμὰ περὶ πλευρῇσιν ἔχοντα
Λητοΐδου ὑπὸ χερσὶ διὲκ προθύροιο περήσειν,
ἢ σὲ <u>φέροντα</u> μεταξὺ κατ’ <u>ἄγκεα</u> φηληγεύσειν.

159 *λαβόντα* [catching] *ἄγκεα*… *ulnas* dici arbitror. Herm.

S. 206–210 (st. 27)
‘Apollo soon will pass within this gate
And bind your tender body in a chain
Inextricably tight and fast as fate,
Unless you can delude the God again
Even when within his arms—ah, runagate!’

原文 l. 159 *φέροντα*（略奪しながら）の代わりにヘルマンは *λαβόντα*（つかまえて）とし、更に *ἄγκεα*（谷間）を ulnas（腕）を意味すると註をつけている。この「つかまえて」はどうも続きにくいし谷間と腕では大いに内容も異なるのであるがシェリはこの *σέ* にアクセントが付いて強調されていることに注目してか、この引用の前半はアポロンが縛り上げる

ことを強調し、後半はヘルメースの方が、アポロンの腕にかかってからでさえアポロンをだますという話に仕立て上げた。いやこのテクストではそれが最善の方法と言えるかもしれない。そしてここも一音節語を多用し、t-t, f-f (l. 208) や w-w, a-a (l. 210) の頭韻を利かせた 3 行目、5 行目、更に d-d-d, g-g (l. 209) の音を畳み掛ける 4 行目が心地よくきびきびしたリズム感を与える。

この部分に相当するチャップマン訳 293–302 行は、訳は内容を取り違えたか、原文から大きく外れている。即ち前半は「お前は外へ出て行く方がましだ。」(l. 296 Thou rather shouldst be getting forth thy gate.)、後半は「ラトーナが立腹、捕えに来るだろう。」(ll. 299–301 To be impos'd by vext Latona's hands, | Justly incenst for her Apollo's harms.) となりラトーナの息子ではなくラトーナが主語になっている。

3 ヘルマン版が誤りとは言えない場合

Gk. 478–479
εὐμόλπει μετὰ χερσὶν ἔχων λιγύφωνον ἑταίρην
καλὰ καὶ εὖ κατὰ κόσμον <u>ἐπιστάμενος ἀγορεύειν</u>.

479 *ἐπισταμένην* Herm.

S. 642–644 (st. 81)
. . .—and with fleet fingers make
Thy liquid-voicèd comrade talk with thee,—
It can talk measured music eloquently.

l. 479 の分詞がアレン版では男性主格になっているので l. 478 の命令文の主体アポロンに係るが、ヘルマン版では女性対格になっているのでこの分詞句「語る事が出来る」は「清澄な声の友」即ちヘルメースが進呈しようとしている竪琴に係る。したがってシェリは上記の如く「この琴は感動的な調べの楽を奏でてくれる。」と訳して原文の感触をよく伝えている。さてこの部分に関してアレン版とヘルマン版のどちらが正しいかということになると私にはヘルマン版のようにするのが自然のように思われる。l. 479 の前半部分は「美しく見事に調律されている」と楽器に関する表現のようで、自然後半の分詞句も楽器にかけたい。またこの作品全体の流れからも、それが相応しい。即ち原文 467–474 行ではヘルメースがアポロンを讃美し、アポロンが十分この特別の楽器を奏する能力があると認めた上で、この楽器を手渡すことになり、478–488 行はこの楽器がいかにすばらしいかを語る場面だからである。

III シェリ的表現・シェリ的解釈——逐語（literal）訳より読むに値する韻文（legible）訳を——

次の 4 つの例についてシェリ訳の特徴を調べたい。

1 亀の処理の速さの表現

Gk. 43–46
ὡς δ' ὁπότ' ὠκὺ νόημα διὰ στέρνοιο περήσῃ
ἀνέρος ὅν τε θαμιναὶ ἐπιστρωφῶσι μέριμναι,
ἢ ὅτε δινηθῶσιν ἀπ' ὀφθαλμῶν ἀμαρυγαί,
ὡς ἅμ' ἔπος τε καὶ ἔργον ἐμήδετο κύδιμος Ἑρμῆς.

43 *περήσει* Herm. 44 *ἀνέρος, ὅν τε θαμειαὶ* Herm.
45 [*ὡς δ' ὅτε* ....] Herm.

S. 51–56 (st. 7)
Not swifter a swift thought of woe or weal
Darts through the tumult of a human breast
Which thronging cares annoy,—*not swifter* wheel
The flashes of its torture and unrest
Out of the dizzy eyes—*than* Maia's son
All that he did divise hath featly done.

原文の Gk. 43–44「まるで心配事で頭がいっぱいになっている人の、心の奥まで、ある思想がす速く滲みわたる**時のように**」、Gk. 45「あるいはちらっと見る目がまわってくらむ**時のように**」という比較の表現をシェリは、それぞれ、S. 51–53「群がる憂慮、悩ます（人の）心の嵐の中を、| 悲喜の思いが（矢のように）射抜く速さも**及ぶまい**」、及び、S. 53–55「又心の煩悶不安の閃光が目をくらます速さも**及ぶまい**」と訳し、更に原文最終行 Gk. 46 を「マイアの息子、そのたくらみを手際鮮やか仕遂げた**のには**。」（S. 55–56）と訳してこの条りを結んでいる。シェリの比較の表現は原文より大袈裟で強烈、使う用語も s-s-th, w-w (l. 51), d-th-t (l. 52) 等頭韻の音響的効果で加速度的な速さを表現したり dart（矢が飛ぶ）や tumult（大混乱、激動の嵐）、wheel（旋回する）や flash（雷電の閃光、発火）等烈しい言葉を用い彼の詩のテンポよいリズムと相俟って、いかにすばやく処理したか、子供ながらその才能の非凡さを強調し迫力満点といえる。

2 簡略化——アポロンのワナが瞬時に消える

Gk. 409–413
Ὡς ἄρ' ἔφη, καὶ χερσὶ περίστρεφε καρτερὰ δεσμὰ
ἄγνου· ταὶ δ' ὑπὸ ποσσὶ κατὰ χθονὸς αἶψα φύοντο
αὐτόθεν ἐμβολάδην ἐστραμμέναι ἀλλήλῃσι
ῥεῖά τε καὶ πάσῃσιν ἐπ' ἀγραύλοισι βόεσσιν
Ἑρμέω βουλῇσι κλεψίφρονος·

411 *αὐτόθεν, ἀμβολάδην* Herm.

S. 547–548 (st. 69)
—he spoke, and bound
Stiff withy bands the infant's wrists around.

S. 549–552 (st. 70)
He might as well have bound the oxen wild;
The withy bands, though starkly interknit,
Fell at the feet of the immortal Child,
Loosened by some device of his quick wit.

Gk. 409–410「アポロンはこのように（原文 ll. 405–408 で言ったこと）言ってこりやなぎの枝で作った強力なワナを両手で振りまわした。」を S. 547–548 では「アポロンはこう言って縛りつけた、| 強(こわ)いやなぎの帯で赤児の手首ぐるぐる巻きに。」と訳し、続く Gk. 410–413「ところがそのこりやなぎが足許のその同じ場所から地面一面に突然生え、ところかまわず生えのびて互いにからみ合い、人をたぶらかすヘルメースの意のままに、易々と野に住む牛たちすべての上に拡がった。」という描写をシェリは S. 552「その児の賢い速業で解け。」という 1 行で片づけ、この S. 547–548 と S. 552 の間の S. 549–551 は必ずしも原文通りではないが、そもそも原文 l. 409 と l. 410 の間にテクストの欠落があり、特にアポロンがワナで何を縛ろうとしたかが明らかでなく岩波文庫の逸身・片山訳では「牛」と解釈*20 しているが、シェリはこれを「ヘルメース」と解釈（S. 548）し、S. 549–551 (st. 70)「あばれ牡牛をしばるがましか、| やなぎの帯は、しっかり綯われてはいても | 不滅の赤児(かみ)の足下に落つ」として辻褄をあわせて S. 552 につなげている。原文のように「ワナになるはずのこりやなぎがヘルメースを縛らずに、あたり一面に繁殖してアポロンを唖然とさせる」という話が伝わっていたものを原作者は入れたのであろうが、シェリはヘルメースの

*20 逸身喜一郎・片山英男訳『四つのギリシャ神話——「ホメーロス讃歌」より』岩波文庫 [1985], 1998, p. 138, pp. 214–215 n.

もっと知的な面や音楽的才能を重視し、全体のリズムも考えてこの挿話の逐語的詳述は避けたのであろう。

3 大袈裟な表現——滑稽味につながる

Gk. 309–311

οὐ γὰρ ἐγώ γε
ὑμετέρας ἔκλεψα βόας, οὐδ' ἄλλον ὄπωπα,
αἵ τινές εἰσι βόες· τὸ δὲ δὴ κλέος οἷον ἀκούω.

S. 408–412 (st. 52)

'—I
Stole not your cows—I do not ever know
What things cows are—Alas, I well may sigh
That since I came into this world of woe
I should have ever heard the name of one—'

S. 410–412 'Alas ... the name of one' に対応する原文は、Gk. 311 後半「噂だけは聞いていますがね。」のみ、逆に Gk. 310 後半「他人が盗むのも見たこともない」はシェリ訳にはないがそれに続く Gk. 311 前半「一体全体牛ってどんなものかも知らない」といえば他人が盗んでいても分からないということになるのでそういう無駄な逐語訳はしない、あるいは敢えて訳す必要もないとシェリは考えたかも知れない。それよりも赤児に牛泥棒の嫌疑がかけられるとはとんでもないという驚きと嘆きを強調するために人生の悲運を散々経験した者が使う表現「悲嘆のこの世」(this world of woe) を用いて雄弁に語る様は読む者の笑いさえ誘い滑稽な雰囲気を作り読者を引き込むことになる。すべて一音節語を用い幼児語も連想させ赤児の非凡な知力と滑稽さが強く印象づけられる。

4 「二人で牧場へ」はシェリ的解釈か

Gk. 491–495

<u>ἡμεῖς</u> δ' αὖτ' ὄρεός τε καὶ ἱπποβότου πεδίοιο
βουσὶ νομοὺς Ἑκάεργε <u>νομεύσομεν</u> ἀγραύλοισιν.
ἔνθεν ἅλις τέξουσι βόες ταύροισι μιγεῖσαι
μίγδην θηλείας τε καὶ ἄρσενας· οὐδέ τί σε χρὴ
κερδαλέον περ ἐόντα περιζαμενῶς κεχολῶσθαι.

492 *νόμους ἑκάεργε* Herm.

S. 661–667 (st. 84)

'And *let us two* henceforth *together feed*

On this green mountain slope and pastoral plain
The herds in litigation—they will breed
Quickly enough to recompense our pain,
If to the bulls and cows *we* take good heed—
And thou, though somewhat over fond of gain,
Grudge me not half the profit.'

まずこの引用の前半、牧場へ行くのは誰かということを考えたい。主語は「私たち」で動詞は「牧人生活をする」の未来形、1人称複数であるから「私たち（即ちヘルメースとアポロン）は山や馬が草喰む野でそこの牛たちを育て牧人生活を致しましょう。」という意でシェリは S. 661–663 で「われら二人はこれから共に｜この緑の斜面と草原で、訴訟の牛群（うし）を飼いましょう。」と訳している。ロエブ版 'while I for my part will graze down...' 岩波文庫の逸身・片山訳「わたくしのほうは……」両訳とも牧場へ行くのはヘルメースになっている。この引用の直後にヘルメースは琴をアポロンに渡し、それをアポロンは喜んで受け取り牧場の仕事をヘルメースに委ねる。更に引用前半に続く Gk. 493–4 では「すると牝牛たちが牡牛たちと交わって仔牛を牝も牡もいっぱい産むでしょう。」とあるのでこれに続く Gk. 494–495 は「でもあなたがいくら儲けに目がないお方でも、ひどくご立腹になってはいけません。」つまり琴と引き換えに牧場の仕事をヘルメースにまかせて損をしたと立腹してはいけないという。これでロエブ版イヴリン・ホワイト訳や逸身・片山訳は後半「牧場の儲けをヘルメースが独り占めする」と想定して、その場合「損をしたとひどく立腹してはなりません。」と解釈されたのであろう。これに対してシェリは兎に角前半 Gk. 491–492 は「われわれ」が主語になっているからにはヘルメースとアポロン二人が牧場へ行くのは原文通り、アポロンはヘルメースの仕事振りを見守るにしろ、牛の所有者としてであれ牧場の仕事に関わると考えたのであろう。然る後 S. 663–667「彼らはすぐに、｜仔を産み痛手埋めるでしょ、｜二人で面倒よくみれば——｜あなたは儲けがお好きでも、｜けちらず利益は折半で。」と解釈したとしても全く不自然ではない。音楽ですっかりアポロンを魅了してアポロンはヘルメースに牧場を支配する権限を与えて二人はすっかり仲直りした時、「これから二人仲良く牧場の仕事をし利益も半分ずつでいいですよ、それでも琴の方はあなたがそんなに気に入っていらっしゃるのですから惜しみなく進呈しますよ。」と琴を渡すヘルメースは一層魅力的で気品さえ感じられるのではないだろうか。

IV　シェリ的表現と詩型の活用

前章で見たシェリ的表現とも関わるが内容に応じて八行連句をいかにうまく活用したか、二つの全く異なる使い方を1例ずつ見てみよう。

1 知性と意志（Wisdom and Will）の表現

S. 212–229, sts. 27–29 (Gk. 162–169, 170–175)
母女神への反論：

—'Dear mother,'
Replied sly Hermes, 'wherefore scold and bother?

28

'As if I were like other babes as old
And understood nothing of what is what 215
And cared at all to hear my mother scold.
I in my subtle brain a scheme have got
Which whilst the sacred stars round Heaven are rolled
Will profit you and me—nor shall our lot
Be as you counsel, *without gifts or food* 220
To spend our lives *in this obscure abode.*

29

'But we will leave this shadow-peopled cave
And live among the Gods, and pass each day
In high communion, sharing what they have
Of profuse wealth and unexhausted prey, 225
And from the portion which my father gave
To Phoebus, I will snatch my share away,
Which if my father wills not—*nathelesse I,*
Who am the king of robbers, *can but try.*'

ここでも S. 218 に当る原文はないが「永遠に」という意を強調し、これを含む S. 217–219 は「私はこの妙なる脳に企みがあり、| 聖なる星が『天』を巡る限りには、| 母上とわたしの益(ため)になりましょう」と原文よりなめらかにつながり直前の 5 行（S. 212–216）の「他の赤児と同様に思うな」という内容との対比もあざやかで 'sly' (S. 213) や 'subtle' (S. 217) の二語が効いてしたたかな赤児ぶりが印象づけられる。実に *ottava rima* の ab ab ab cc という 8 行を締め括る cc の韻律をうまく生かして、28 連の最後の 2 行（S. 220–221）では、演説の中締め故か、不完全脚韻ながら、自分達の今の劣悪な条件二つ 'without gifts or *food*' と 'in this obscure *abode*' を強調、29 連では、神々の仲間入りという地位獲得のためには、自分の本来の職務を発揮しますよ（nathelesse *I*, | Who am the king of robbers, can but *try*.）と、とどめをさしてこの連を終わっている。

この演説の中締めと、とどめをさす結びの部分はそれぞれ原文の強い口調をよく伝えて

いる。即ち中締めは Gk. 167–169「不死の神々の中で｜我々二人だけが捧げものも祈祷も受けずに｜他でもないこの場にとどまることはできないのです。母上がおっしゃる通りには。」で、結びは Gk. 174–175「そこでもし父上がそれを与えないなら、それこそ僕は｜泥棒の長になって見せますよ。」である。

2 音楽と愛の力（Music and Love）

S. 581–599, sts. 74–76 (Gk. 435–440, 441–446, 447–449)
ヘルメースの音楽を聴いた、アポロンの感動：

74
These words were wingèd with his swift delight—
'You heifer-killing schemer, well do you
Deserve that fifty oxen should requite
Such minstrelsies as I have heard even now.—
Comrade of feasts—little contriving Wight, 585
One of your secrets I would gladly know,
Whether the glorious power you now show *forth*
Was folded up within you at your *birth*,

75
'Or whether mortal taught or God inspired
Thy power of unpremeditated song— 590
Many divinest sounds have I admired,
The Olympian Gods and mortal men among,
But such a strain of wondrous, strange, untired
And soul-awakening music sweet and strong
Yet did I never hear except from *thee*, 595
Offspring of May, impostor *Mercury*!

76
'What Muse, what skill, what unimagined use,
What exercise of subtlest art has given
Thy songs such power?'

同じ八行連句でもこの部分は「母女神への反論」の場合と趣を異にする。即ち 74 連の前半は「これだけすばらしい音楽を聴かせてもらったら 50 頭の牛泥棒の罪は帳消にするに十分だ」と取引をまず片づけて、いやむしろ牛泥棒への怒りを愛が消し去り形勢逆転、連の途中で大きな段落。その感動を、これから後 74 連後半から 75 連終わりまでで、息もつかずに一息で歌い上げている。

内容的には音楽の専門家である筈のアポロンがヘルメースの才能に脱帽して 74 連の後半で「その不思議な音楽の秘訣を一つでも知りたいが天性のものか」と言いすぐに 75 連に続きしかもこの連では「人の教えか神の誰かの霊感か｜巧みなく自然に歌うその力――｜数多の妙なる楽に敬服したが、｜オリュムポスの神々や死すべき人との交わりで。｜だがこんな驚嘆すべき、不思議な、飽きない、｜それに甘美で強力で、魂揺さぶる楽曲は｜お前以外にためしなし、｜マイアの息子、詐欺師ヘルメースよ。」とこの連の終りまで即ち 74 連後半から 75 連の終りまで 12 行を一息で歌う。したがって 74 連の最後の 2 行は脚韻も *forth, birth* で完全な cc ではなくこの連は完結していないことを音楽的にも感じさせ、75 連後半の 4 行は音楽のすばらしさを表現するのに soul-awakening というこの詩の中では珍しく長い形容詞で表現に窮した様を示しつつ 6 つの形容詞を用い 7 つの s 音で音楽の透明性を表現しつつ一気に歌いあげこの連の最後の 2 行で息詰るような 12 行の結びとなる。したがってこの 75 連の最後の 2 行はしっかり cc の韻（*thee* と *Mercury*）を踏み、非常に強く、重い。そして 76 連初めの 3 行では短く区切った質問を矢継ぎ早に息も絶え絶えに連発して「どんな詩神が、どんな手腕が、至高の秘術の｜どんな訓練、想像できぬ方法が｜お前の歌にかかる力与えしや。」と知りたくて気が狂いそうなアポロンの様子が目に浮かぶ。

ここに引用した 2 連余のシェリ訳は全篇を通して最も原文に近いものではないだろうか。それはアポロンの感動が原作者に乗り移り、それが読み手であり再現者であるシェリに伝わり自然に訳となったように感じられる。更にこの感動の源はヘルメースの音楽の力によってかきたてられたアポロンの胸の中の「愛」（音楽とヘルメースに対する愛）で、これこそこの讃歌の最大の魅力でありシェリも最も魅せられたところではないか。これはまさにこの条りの直前 Gk. 434 (*τὸν δ' ἔρος ἐν στήθεσσιν ἀμήχανος αἴνυτο θυμόν*)「するとアポロンの胸の中でおさえがたい愛が心をとらえた」（S. 579–580 では '—and [he] did move | Apollo to unutterable love.'）の 1 行で表現されている事実をアポロン自身の「翼ある言葉で」（Gk. 435, S. 581）表現したものであるからである。

V まとめ

シェリは『詩の弁護』（*A Defence of Poetry*, 1821）で翻訳の無意味（the vanity of translation）を主張し*21、同じころ、ある婦人への手紙でも翻訳は原作を破壊するものでさえあると言っている*22。それにもかかわらず彼が翻訳したのにはかなりの事情があったはずであ

*21 *The Complete Works of Percy Bysshe Shelley*, ed. Roger Ingpen and Walter E. Peck, vol. vii Prose, p. 114.
*22 *Letters*, ii, pp. 277–8.

る。1818年から翌19年にかけて二人の愛児、クレアラとウイリアムを失い*23これと相前後して非常に身近で大切な人物を二人も失い*24、シェリは極度に意気消沈していた。この頃書いたとされる詩行を見ると彼が完全に生きる望みを失い死への憧れさえ感じられる。即ち*25

> Alas, I have nor hope nor health,
> Nor peace within nor calm around,

や更に「しおれたすみれに」('To a Faded Violet')*26には生きている自分自身をあざ笑う罪悪意識さえ感じられる。愛児に先立たれ妻メアリとも気まずくなり精神的に孤立し創作意欲さえ失ったシェリの心の逃げ場はギリシア文学であり、しかも、日常的に彼の興味はホメーロスの長詩やギリシア悲劇にあったが、この時のように心が落ち込み兎に角慰めやインスピレーションを求める時はパストラルや『ホメーロス讃歌』が相応しかった。第一章で見たように、1818年1月にはじめた『ホメーロス讃歌』の翻訳が中断されて残っていた中に『アフロディーテ讃歌』(ヘルマン版番号III) 57行以後と『ヘルメース讃歌』(同II) があった。インスピレーションを求め勇気を奮い起たせてくれるものとして『ヘルメース讃歌』は打って付けでこれを選んだと考えられ、更にシェリにとって原詩から吸い取った精神を反芻し再現すること即ち翻訳が自らの創造力を育てるに必要な練習過程のようなものであった。このためにも『ヘルメース讃歌』は長さや内容から適しており、ギリシア悲劇やホメーロスの長詩は原作を壊したくない気持ちも強かったようだ。こうして選んだこの『讃歌』の主人公ヘルメースの所々自在、多芸多才です速い行動力はシェリを魅了し自分自身がヘルメースになったつもりでキュレネーからピエリアの山へ、ピエリアからオンケストスへと飛びまわる気分になったにちがいない。それはそのままリズミカルな生き生きした表現になった。アーノルド (Matthew Arnold) はホメロースを訳すには特に原作のスピード感、単純率直さ高貴さを大切に原作者の精神を正しく掴みその上適切な詩型を選ばなければいけないといっている*27。アーノルドは『イーリアス』の英訳を例に話をすすめているが原作者の精神 (divine essence) を訳者が把握あるいはそれと一体化し

*23 Clara Shelley, 1818年9月24日1歳でヴェネツィアで、William Shelley, 1819年6月7日3歳半でローマで死亡。

*24 この二人の人物については複雑な出来事と事情がからまっており、Thomas Medwin, *The Life of Percy Bysshe Shelley*, vol. 1, London, Thomas Cautley, 1847, pp. 324–9及びJames Bieri, *Percy Bysshe Shelley: A Biography*, the Johns Hopkins Univ. Press, Baltimore, pp. 431–448に詳述されている。

*25 'Stanzas written in dejection—December 1818, near Naples', ll. 19–20.

*26 Medwin, vol. 1, p. 333.

*27 Matthew Arnold, *On Translating Homer* [1861] in *On the Classical Tradition*, ed. R. H. Super, Ann Arbor, the University of Michigan Press, 1960, pp. 102, 142.

それを表現する適切な詩型を選びこれをいかに生かすかが優れた韻文訳の条件になることは『讃歌』の場合にもあてはまることである。すでに見たとおり、インスピレーションを求めて翻訳対象の原作を選んだわけであるから原作の精神とは極自然に一体となることが出来たであろうし、ノートブックに記されたメモで見たように、詩型選択にもあれだけ苦心した。八行連句だけでも英内外の作品を音読し、とりわけイタリアの詩人フォルテグエルリ（Niccolò Forteguerri）の風刺詩『リッチャルデット』（*Ricciardetto*, 1738）は『ヘルメース』翻訳直前2週間以上（1820年6月26日〜7月11日）殆ど毎日音読し*28 八行連句の本場イタリアの音やリズムにも耳を馴らしこの詩型には自信をもっていたにちがいない。その上で逐語訳を排し音読して読むに値する音楽的な訳にしようと心掛けた。原詩6行を8行の英訳に、を目安に時には思い切った強調や省略もある、ということはすでに見てきた通りである。テクストの不備も余り気にせずというのは冒頭のラングの言葉にもあったが、そのラングは「優れた韻文訳の花」（the movement and the fire of a successful translation in verse）のない「散文訳は豪華な御馳走の食卓からこぼれ落ちたパン屑のようなものである」*29 と言って、散文訳の味気なさを十分承知しシェリ訳『ヘルメース讃歌』のことを念頭においていたのではないか。アーノルドも翻訳は「読む者に翻訳であると感じさせぬもの」であるべきだといっている*30。シェリ訳『ヘルメース讃歌』を読む者は翻訳であることを忘れ「シェリの詩」を読んでいる気持になる筈だ。確かにそれは原詩の代わりにはなり得ないがアーノルドが言う原作のスピード感、単純率直さそれに高貴さもあり、原作の精神に限りなく近いものが伝えられ韻律の上からも心地よく読めるものならば、シェリがめざした「読むに値する韻文訳」（a legible translation）は達成されたのではないだろうか*31。

（立命館大学）

参考文献

1 ギリシア語関係

Allen, Thomas W. ed. *Homeri Opera* 5 vols., vol. v, Oxford Clarendon Press, 1912.

*28 *Mary Shelley's Journal*, p. 135.

*29 *The Odyssey of Homer Done into English Prose* by S. H. Butcher and A. Lang, the Clarendon Press, 1879, revised and repr. Macmillan and Co., 1893, p. viii.

*30 Arnold, p. 97.

*31 査読者の方々からは誤りや疑問点の貴重なご指摘を頂き、感謝し修正させて頂いた。

Arnold, Matthew, *On the Classical Tradition* ed. R. H. Super, Ann Arbor, the University of Michigan Press, 1960.
Butcher, S. H., and Lang, Andrew, *The Odyssey of Homer Done into English Prose*, the Clarendon Press, 1879, revised and repr. Macmillan and Co., 1893.
Evelyn-White, Hugh G. ed. *Hesiod Homeric Hymns Epic Cycle Homerica*, Harvard Univ.Press, [1914], repr. 1998, Loeb C. L.
Hermann, G. ed. *Homeri Hymni et Epigrammata*, Leipzig, 1806.
Lang, Andrew, *The Homeric Hymns, A New Prose Translation and Essays Literary and Mythological*, George Allen, 1899.
Nicoll, Allardyce ed. *Chapman's Homer, The Iliad, The Odyssey and The Lesser Homerica* 2 vols., vol. 2, Princeton University Press, 1967.
Southey, Robert ed. *The Works of William Cowper, Esq.* vols. XI–XII, *The Iliad of Homer trans. into English Blank Verse* by W. Cowper repr. from 1837 ed., AMS ed. 1971.

逸身喜一郎・片山英男訳『四つのギリシャ神話――「ホメーロス讃歌」より』岩波文庫 [1985], 1998。

2 シェリ関係

手稿

Bodleian MS. Shelley adds. e.9, pp. 117 and 118.
Percy Bysshe Shelley vol. xiv, Shelley's "Devils" Notebook, Bodleian MS. Shelley adds. e.9, A Facsimile Ed., ed. P. M. S. Dawson and Timothy Webb, Garland Pub. Inc., 1993, pp. 124–127 etc.
Percy Bysshe Shelley vol. xviii, *The Homeric Hymns and Prometheus* Drafts Notebook: Bodleian MS. Shelley adds. e.12 (A Facsimile Ed.), ed. Nancy Moore Joslee, Garland Pub. Inc. 1996, pp. 275–244 (writ. in reverse).

テクスト（含書簡・日記）

The Complete Works of Percy Bysshe Shelley Newly ed. Roger Ingpen and Walter E. Peck in 10 vols., vol. 7 Prose, Gordian Press & Earnest Benn, 1965.
The Letters of Percy Bysshe Shelley vol. i *Shelley in England* ed. F. L.Jones, Oxford at the Clarendon Press, 1964.
The Letters of Percy Bysshe Shelley vol. ii *Shelley in Italy* ed. F. L.Jones, Oxford at the Clarendon Press, 1964.
Mary Shelley's Journal ed. F. L.Jones, University of Oklahoma Press, 1947.
The Poems of Shelley vol. ii, 1817–1819 ed. Kelvin Everest and Geoffrey Matthews etc., Longman, 2000.
The Poems of Shelley vol. iii, 1819–1820 ed. Jack Donovan etc. Longman, 2011.
The Poems of Shelley vol. iv, 1820–1821 ed. Michael Rossington etc. (Longman Annotated English Poets) Routledge, 2014.

批評

Bieri, James, *Percy Bysshe Shelley: A Biography*, the Johns Hopkins University Press, Baltimore, 2008.
Medwin, Thomas, *The Life of Percy Bysshe Shelley* in two volumes, vol. i, Thomas Cautley Newby, 1847.
Thompson, Francis, *Shelley* with an Introduction by George Wyndham, Burns and Oates, 1911.
Webb, Timothy, *The Violet in the Crucible: Shelley and Translation*, Oxford Clarendon Press, 1976.